

2012.6.9

天地人

新緑のブナ林に囲まれた「円形劇場」では、水辺に純白のミズバショウ、黄金色のリュウキンカ、陸地には赤紫のカタクリが一斉に咲き競い、小ぶりのギフチヨウがひらひらと愛きょうを振りまく▼水無月の水無温泉は輝いて見えた。標高1400^{メートル}。気象条件が厳しい分、短い春に命をつなぐと懸命に生きているからだろう。旧利賀村の中心部からバスで山道を南へ約40^分、最後は2^{キロ}歩く。岐阜県境の国有林、白木水無県立自然公園に指定される保全価値の高い地域だ。普段は車の通行が制限されるだけに、町に住む者たちの自然志向を大いに満足させてくれた▼観察会を世話した利賀飛翔の会の須河隆夫顧問によれば、カタクリの群落が以前より広がり、気がかりだという。素人はいろんな花と一緒に楽しめてありがたものの、カタクリは乾燥化の指標だと聞けば、素直に喜べない▼かつて周りのブナが切り倒されたことがあった。豪雨で土砂崩壊が起き、温泉の水の流れが変わったことも関係あるようだ。弥陀ヶ原などの温泉は地球温暖化や開発の影響に特に敏感であり、百年単位でみれば、植生が移り変わっていく「遷移」の定めどおり、草原化は仕方ないことか▼それでも、中西邦康会長は「感動を与えてくれた自然を後世に残すのは今を生きる我々の務め」と、「水無」ならぬ「水有」の妙案を探し続ける。